東方探究綴

@れみリア従

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方探究綴

【Ｎコード】
Ｎ２２８５ＢＡ

【作者名】
@れみリア従

【あらすじ】
みょんなことから幻想入りした少年。
霊夢がその少年を元の世界に帰さなかったら？
そんなｉｆから始まる話です。
基本的に原作設定で進めますが時々二次も入ります。

構想はしてありますが、文才がないのでその辺は勘弁してください。

レビュー等くだされば嬉しいかぎりです。

紅忌

それは本当に普通の、とある1日の終わりに起こった。

部活を終え、帰宅する途中の出来事だった。

もう大分遅い時間なのだが、季節が季節なのでまだ辺りは暗くなってはいない。

まだまだ暑い。

コンビニに立ち寄り、特に考えもなくアイスを選ぶ。

……溶けきる前に帰らなくちゃ。

いつもは使わない、近道を通ることにした。

近道というのは、学校と家とを挟むようにある山を登る道のことだ。

単純な直線距離は遥かに短いが、部活を終え疲れきった身体にはなかなか堪える坂道だった。

特別な理由が無ければ関わることの無い、そんな道だった。

勢いをつけ、登り坂に入り込む。

始めは順調に進むも、登るに連れて脚の動きが鈍くなる。

最終的には自転車を押して進み、なんとか上までたどり着いた。

小さな山の、頂上。

ここは少し拓けた広場のようになっている。

昔ここには何かの建物があったらしいが、既に取り壊され今は閑散としているだけの場所である。

ここにくる人は殆どいないだろう。

何かの気配を感じ目を凝らしてよく見ると、そこには猫が居た。

全身黒い毛に覆われている。

野良猫だろうか？

なるべく警戒させぬよう、ゆっくりと近づいてみる。

自転車の立てる音以外は何も聞こえない。

意外にも、触れる距離まで近付いてもその猫は逃げない。

人に慣れているのだろうか？

確認すると首輪はないので、恐らく野良だと思う。

撫でてやると目を閉じて、とても気持ち良さそうにしている。

とても可愛らしい。

辺りを見回すと随分暗くなっていることに気付く。

猫と遊ぶのに夢中で完全にこの道を選んだ理由を忘れていた。

もうアイスは手遅れかな…。

そんなことを考えながら自転車に跨がる。

最後に猫の頭を撫でて、出発。

下り坂を抜ければ、家まですぐだ。

深呼吸して、坂道を勢いよく下っていく。

暗いせいで、急いでいるせいで、坂道が何かによって塞がれていることに気付かない。

目前に迫るも、既に遅い。

激突し、自転車ごと空中に投げ出される。

出逢い

「いてて……。」

……どうやら気を失っていたらしい。

それもそうだ。

コンクリートに全身を叩きつけられたら……。

……いや、違う。

何度確かめてもこれは土の感触。

さっきまで通っていた筈の舗装された道はどこにもない。

ひんやりとしたコンクリートの感触なんかどこにもない。

とりあえず冷静に、辺りを見回す。

……辺りの景色も随分と変わってしまっている。

いくら山道と言ったって、ここまで草木は多くなかったし、そんなことより。

山の麓にあった民家が無くなっている。

自分の家も含めて。

何となく違和感を感じすぐに携帯電話を確認するが……圏外。

時計を見ると、どうやら一時間以上倒れていたらしい。

しかし不幸中の幸いか、背中の痛みを除けば身体に大きな怪我はないようだ。

直ぐに立ち上がれることができた。

自分のすぐ近くに倒れている自転車は、前輪が折れ曲がりどう考えてももう乗れないだろう。

唯一の食料だったアイスも泥だらけで食べられたものじゃない（勿論溶けきっているのだが）。

しかしここでどうこうしても何も変わらないだろう。

今の状況をなるべく早く把握したい。

ここは一体どこなのだろうか。

……とりあえず山を降りてみよう。

アテがある訳ではないが、とにかく歩いてみる。

誰かに会うことができれば何か変わるかもしれない。

そう信じたい。

……歩きながら色々考えてみようか。

何かの拍子に別の世界に飛ばされたのか。

或いは何かの拍子にタイムスリップしてしまったのか……。

あまり信じたくないが、そう解釈するのが一番近い気がする。

単純に気絶している間に拐われて、似たような別の場所に置き去りにされた……というのも一応考えられるか。

でも誰が何の為に？

そう考えるとその線は薄い気がする。

……俺は集中すると周りが見えなくなるらしい。

考えている内に辺りの雰囲気が少し変わっていることに遅れて気付く。

木々は少なくなり、坂道はもう既に終わっている。

民家などがありそうな気配は全くないが、山の中をさ迷うよりは大

分マシだろう。

そんなことを思いながら歩き続けていると、どうやら早速いい方向に向いてきたらしい。

向こうに誰か居る。

後ろ姿からどうやら女の子らしいことが分かる。

綺麗な金色の髪に大きなリボンをつけている。

背丈的にどう考えても子供……だよな？

なんでこんな時間にこんな所に？

疑問は尽きないが、折角人に会えたんだ。

とりあえず声をかけてみよう。

早足で少女に近付く。

「あの……。」

「ん？なに？」

髪の色から日本人じゃないのかと思ったが、問題なく言葉は通じる。

「村とか民家が近くにあったら方向を教えて欲しいんだけど…。」

「人間の村はあっちにあるけど…。」

「本当に？ありがとう！」

これでなんとかなる……気がする。

女の子はじろじろこっちを見ている。

視線が気になるが、構わず足を進める事にしよう。

どうなるかは分からないが、こんな所で野宿だけはごめんだ。

それにしてもなんであんな小さな子がこんな所に…？

しかも恐らく1人で。

そこはどうしても気になるが、他人に気を使う余裕が無いのも事実だ。

とにかく教えられた方に向かって歩く。

……が、直ぐに阻まれた。

「ねえ、ちょっと待ってよ。」

さっきの子だ。

他に人が居ないのだ。

どう考えてもそうだろう。

振り向くとまだこっちをじろじろ見ている。

「なに？」

「あんた……食べられる人類？」

「……え？」

突然の意味不明な質問に戸惑う。

「なに？その食べられるなんとかって。」

「やっぱりそうだ。晩ごはんゲットー。」

はあ？

少女の表情は満面の笑みへと変わる。

晩ご飯……？

意味が全く分からない為、どう反応すればいいかもよく分からない。

しかし呆然と立ち尽くす俺に構わず、少女は更に理解し難い行動を続ける。

「えいっ！」

身体を小さくしてからの、肩からぶつかる形の体当たり。

少女は本気だが、なんとも可愛らしい攻撃である。

しかしその直後、見た目からは予想もつかない衝撃が襲い掛かる。

全く構えて無かったため体全体で受けてしまい、バランスが崩れる。

地面に全身から叩きつけられる。

「げほっ！」

急な痛みから喉が詰まる。

なんだこの力は！？

どう考えても子供のそれじゃない。

構えてなかったとはいえ、自分より一回りも大きい人間が倒れ込む程の力が出せるとは考えづらい。

どこからどう見ても普通の女の子なのだから。

体勢を直したいが、腹部と背部の痛みが重なり立ち上がる事が出来ない。

「流石に一撃じゃ死なないわねー。」

そう言うと少女は直ぐ様俺の手を掴み、“空を飛んだ”。

飛行機みたいに、手を大きく真っ直ぐ広げて。

その広げた腕は、男1人を掴んでいても傾く事なく一直線に伸びている。

それ程この子の力は強いのだろう。

そういえば……。

この子の発言には確かに気になる点はあった。

この子の言った「“人間の村は”あっちにある」という言葉のチョイス。

普通なら絶対にそんな言い方しない筈だ。

その不自然さに気付けていたら何か変わっただろうか。

……もう既に遅い。

少しずつ地面が遠くなっていく。

このまま何処かに連れていかれるのか。

それともこの高さから突き落とされるのか。

どちらにしてもこの手が離れた時が一貫の終わりだ。

なんとかしないと…。

「俺……食べられるなんとかって奴じゃないと思うよ…。」

考えを巡らせても、焦りと疲れからこんなことしか浮かばない。

自分の無力さが辛い。

「そうなのかー。でももうなんでもいいや。お腹空いちゃったし。」

少女は更に高度を上げる。

どうにかしてこの状況を打破したいが、全く策が浮かばない。

「このくらいまで上がれば大丈夫かな?」

こんな不条理の連続で。

圧倒的な理不尽で人生が終わるなんて。

「それじゃあねー。いただきます。」

恐怖すら感じる笑顔のまま、少女は躊躇いなく手を離した。

この高さじゃどう考えても助からない。

反射的に目を瞑る。

空中で揉まれ、上も下も分からない感覚が続く。

……。

……。

……あれ？

痛くない。

まだ地面まで届いていないからか？

それにしては時間が掛かりすぎじゃないか、と変に冷静になってしまう。

ゆっくりと瞼を開くと、そこにはまた別の、リアリティの無い光景が広がっていた。

派手な巫女服を着た人間が、金髪の少女に何かを投げつけ攻撃している。

もう片方の手はしっかりと俺と繋がれ、宙をふわふわ漂っている。

「……ふぅ。まだ生きてるみたいね。」

助けてくれる……のか？

巫女さんは高速で、しかし俺を落とさないように丁寧に空中を移動。

少女が追い掛けるが、速さは歴然だ。

「ちょっとごはん盗らないでよー！」

何かが俺の顔のすぐ横を掠める。

目を凝らしてよく見ると、手の平から色鮮やかな塊のようなものを発射している。

見た目は綺麗だが、あれも恐らくあの子の攻撃手段の１つだろう。

この世界では物を飛ばして攻撃するのだろうか。

よく見ると巫女さんが投げているのはお札のようなものだ。

「人間なんか食べるわけないじゃない。妖怪じゃないんだから。」

札で牽制しながら巫女さんが呟く。

どうやらこの巫女さんは妖怪ではないらしい。

……確実に空を飛んでるけど。

少なくとも元居た世界には素で空を飛ぶ人間はいなかったが。

もう何がなんだか分からないが、俺はこの人を信じるしかない。

心の中で祈りながら、目の前の非現実的な戦いを見守るしかない。

本気を出したのか少女は少しずつ間隔を狭めていく。

巫女さんのスピードも相当のものなのだが、男1人の重さが足されているのだ。

……追い付かれる！

「時間の……無駄よ！」

巫女さんはどこから取り出したのか、大量の札を投げつける。

薄い紙のようなものに見えるが、鋭く一直線に少女を襲う。

少女は大きく回避するが、動きを完全に読みきっていたのか避けた先にも札が投げられている。

目前で何とか2段階目の札を避ける。

……が、札が少女の体勢を崩し、速度が落ちる。

元々傷を追わせる為のものではなかったのだろう。

その隙にどんどん差を広げていく。

……巫女さんの方が何枚も上手だ。

置き去りにされ、もうあの子の姿は殆ど見えない。

「……もう大丈夫かな。」

ゆっくりと降下し……着地。

僅か数分のことだが土の感触がとても懐かしく感じる。

胸の鼓動は速まったままだ。

状況が全く読めないが、……確かに生き残った。

「あの……。」

「……とりあえず神社に戻りましょ。話はそれからね。」

巫女の思案

巫女の少女に連れられて、着いたのは神社である。

その見た目の古さから歴史の長さを感じさせる。

派手さはないが、その代わりに色褪せない由緒正しさがある。

「えっと……ここは？」

「博麗神社。私の……家？かな。」

なぜ疑問系か分からないが、ここはスルーで。

「さて、中に入りましょ。」

居間に案内される。

中も純和風な雰囲気で包まれている。

辺りを見回すが、テレビや電話などの電化製品は見当たらない。

それでどころか電灯もないようだ。

部屋はランプのようなもので照らされている。

電気が通ってないのか？

かなり古い建物ではあるが、ここだけ通ってないとは考えづらい。

電線がまだ敷かれていないというなら……。

……まあ先ほどのことで薄々気付いてはいたが、やはりここは元居た世界ではない。

「座って待ってて。話があるから。」

こっちも聞きたいことがたくさんある。

この世界はなんなのか。

さっきのは一体なんだったのか。

「ごめん、お茶しかなかった。」

「あ、全然大丈夫です。なんかすいません。」

よいしょ、と少女は自分の向かい側に座った。

髪を括る大きな赤いリボンが特徴的だ。

派手な紅白の巫女服に透き通るような黒髪が映える。

……かなりの美人だ。

年はあまり俺と変わらないように見える。

「えーっと、まずは自己紹介かな。私は博麗霊夢。まあ見て分かると思うけど、この神社の巫女よ。」

早口で要点だけを述べている。

……博麗霊夢、珍しい名前だなあ。

「霊夢さんは人間？」

「……当たり前よ。」

霊夢さんの顔付きが少し不機嫌なものに変わる。

「ちょっと聞きたいんだけど、この世界の人は普通に空飛べるの？」

「あー、そういう事。飛ぶ人間は何人かいるかもね。」

彼女のその表情から、この世界では割と当然のことだったことが伺える。

「まあ、そんな話はどうでもいいのよ。あんた名前は？」

せっかちな性格なのだろうか、早く本題に入りたいらしい。

まだ聞きたいことが色々あったのだが……、仕方ない。

「俺は……。」

そこまで言いかけて気付く。

当たり前に出てくる筈の……。

「……？　どうかした？」

名前が……。

「名前が……分からない。」

「……そう。」

霊夢さんは何かを考えているように見える。

「……。まあ仕方がないことよ。じゃああんたは今から名無しよ。

ナナシ。」

名無しって……。

自分の名前すら思い出せず、得体の知れない土地に放り出されて、一体俺はどうしたらいいんだよ？

頭の中が整理がつかない。

心臓が高鳴り、呼吸が荒れる。

出されたお茶を一気飲みして、喉を潤す。

そんな俺の焦りを知ってか知らずか、霊夢さんは話を続ける。

「それと、今日からここで生活してもらうから。」

「……えっ？」

ここに住むってこと？

もう何がなんだか……。

「……なんで？」

「住む所がないんでしょ？……ていうか、これで解散じゃ呼び名を付ける意味がないじゃない。」

そう言われれば、確かにそうだが……。

初対面の美少女といきなり生活なんて話が上手すぎじゃないのか？

いやまあそんなことは置いといて。

「てことは……元の世界には……。」

言いたいことが分かったのか、最後まで言い切る前に答えが返ってくる。

「……。ええ、帰れないわ。それに、自分の名前も分かんないのに帰ってどうするのよ。」

それもそうだ。

それもそうだけど……。

必死にこの現実に抗える道筋を探すが、どうやら残ってはいないらしい。

……この人を頼る以外は。

せめてもと諦めずに思いだそうとしてみるが、やっぱり無理のようだ。

何処に住んでいて、どんな学校に通っていて。

そういうことは思い出せるが、どうしても……。

自分が何者だったのかがどうしても分からない。

……坂で何かにぶつかった時に頭にぶつけたりしたのだろうか。

手で触った限りでは傷はないし、出血もしていない。

「……悩んでもしょうがないわ。なんとかなるわよ。気楽に捉えましょうよ、ね？」

悩む俺を見かねてか、霊夢さんが声を掛ける。

他人の事だからと言ったらそれまでだが、今の俺にはこの位の楽観さがありがたかった。

気楽に……か。

「そう……だよな。」

「そうよ。今日は疲れてるだろうし、もうそろそろ寝た方がいいんじゃない？」

「そうするよ…。」

優しさが身に染みる。

こんな見ず知らずの人間にどうしてこんなに気を使ってくれるのだろう。

この世界にはこんな人ばかりなのだろうか。

「とりあえず明日から家事全般はあんたに任せるから宜しく。あんたの部屋はテキトーに選んで。あと私のことは霊夢でいいから。それじゃお休みなさい。」

……そういう事か。

お茶を啜りながら、早口で締める霊夢さん。

養う代わりに雑用を任せる、と。

まあお世話になるのだからそのくらいの仕事をするのは当たり前だ。

一方的に決まった感はあるが、他に選択肢はない。

勿論決して悪い条件だとは思わない。

とりあえず明日から頑張ろう。

気楽に……行こう、うん。

「……お休みなさい。」

期待と焦り、いやほとんど焦りだけを抱えて居間を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2285ba/

東方探究綴

2012年1月8日02時45分発行